

よろこびをもって表現活動を追求する音楽科学習

音 楽 科

1. 研究主題について

私たちはこれまで、どのようにしたら子どもが意欲を持って学習に取り組むか。ということについて「表現への意欲を育てる」というテーマで研究を重ねてきた。そして昨年度は「児童自らに学習のめあてを意識させ育てる」ことに重点を置き、本年度のテーマである「めあてを持って表現活動を追求させる」ことにつながっている。いずれにしても、常に教師は「児童の学習意欲を高める授業」を、かつ子どもにとっては「楽しい授業」をくり返すことが基盤となる。言いかえれば、音楽の授業は「『快い』感情を根底とした音楽活動でなくてはならない。」という思想が我々にはある。なぜなら、古来日本の芸道においては、さまざまな苦難を乗り越えて高度な技術や芸術性を習得することが美化されてきた。音楽の場合においても「練習で泣いて本番で笑え」といった言葉をよく耳にする。これは高度な演奏技術を要求するあまり出て来た、あるいは自分自身をはげます言葉であると思われるが、音楽の楽しさ、よさを体験し知っている者が乗り越えられる苦難である。本来音楽は楽しく気持ちの良いものであるから、小学校の段階にあっては、楽しい経験をたくさんし、楽しんだ結果として表現力や知識が身につくような指導からスタートするべきであるからである。また教師自らが楽しんで音楽する（個性を出す、自己表現する）姿勢も児童にとって良きモデルとなるであろう。上記のことを念頭に置きながら音楽科学習における表現活動の過程を次に示す4つの学習の場を考えてみた。学習の流れによっては、はっきりと分けて考えられるものでは決していないが、大きな授業構成のポイントとして考えるのである。

(1) 出合いの場

学習の出発は興味・関心のもてる教材との出会いである。子どもたちの心に感動をさそうような音楽的な魅力がある教材を提示すれば、子どもたちはじっくり味わうなかで表現のイメージをふくらませていくのである。そのためには、心をこめた範唱、範奏、その他レコードや視覚に訴える資料などを提示し、気分、情景など、音色の美しさ、演奏の美しさなどとともに、その教材の音楽のよさを子どもの心に伝えるための提示の工夫に心がけることが大切である。

このように、子どもの心を引きつけて離さない魅力的な教材との出会いの場を、教材開発を含めて工夫したいものである。

(2) 表現のねらいをもつ場

感じたこと、表現に対するイメージは子どもによってまちまちであったり、大きくふくれすぎたりもする。それを「表現のねらい」としてまとめる。表現しながらイメージが広がることもあるが、まず、子どものイメージをどのような表現にしたいかという「めあて」としてもたせることが表現の高まりに結びつくこととして重要だと考える。この段階をきちんとふむことは「やらされる学習」か「自らとりくむ学習」かにかかわってくる。子ども一人ひとりの先行経験や新たな体験を重ね合わせ、個性的で豊かなイメージを表現のねらいに生かしていく場としたいものである。

(3) 表現する場

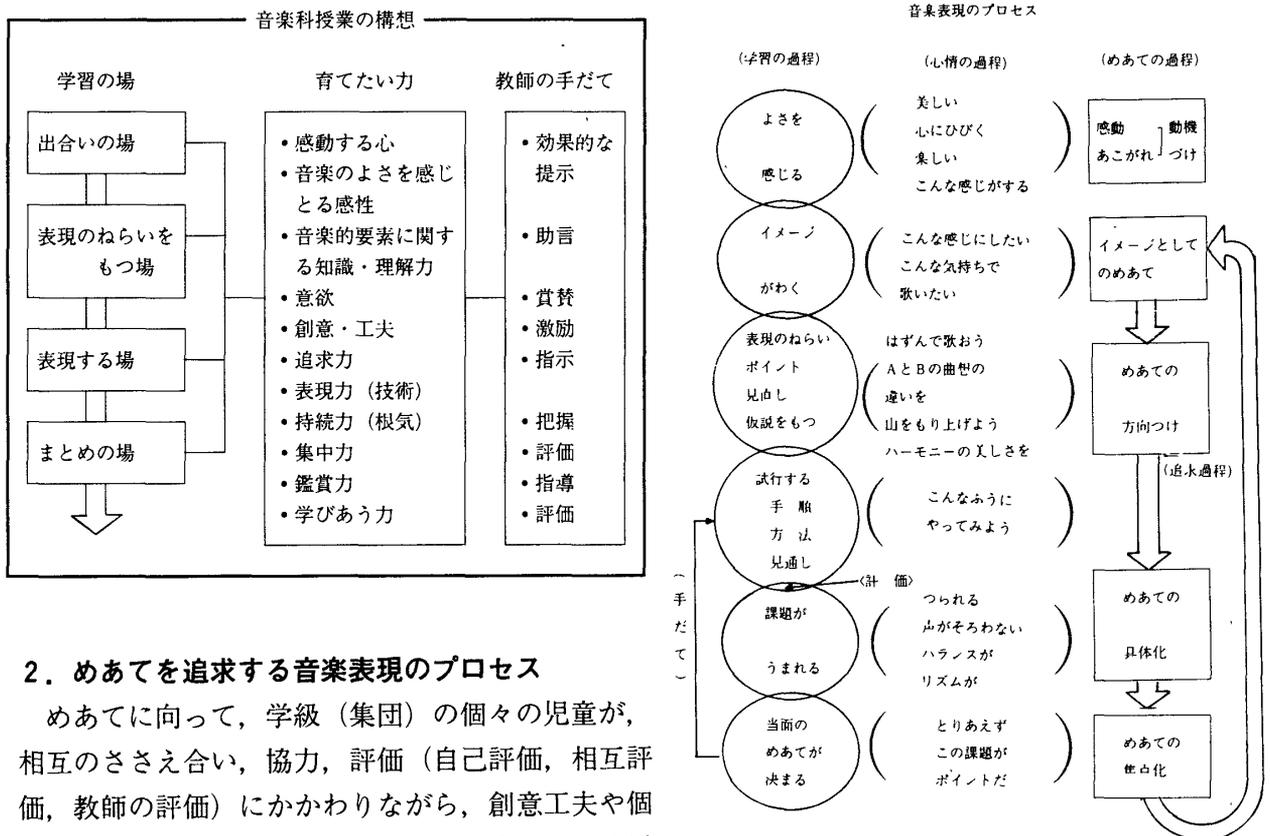
「表現のねらい」をもとに、子ども相互がかかわり合いながら、相違工夫や個性のある発想を表現に生かしていく活動の場である。音楽科において、子どもの学習意欲はその指導過程における評価活動に深いかかわりを持っている。学習の過程で教師は常に評価していく。その時

つい、口の開け方であるとか態度面での評価にかたよりやすいが、音楽的な評価もしなくてはならない。「そういう声、そんな音、こんな奏法が表現が良くなったり豊かになったりする。また気持ちがいい。」といった音楽的な価値がわかるような評価や発言ことばかけが、子どもたちにとって、はじめのイメージや学習意欲の持続、追求へのエネルギーに働くのである。また、子どもの個性のある発想や、創意工夫を生かして試行錯誤する場を設けること、そのような指導の柔軟性が子どものやる気を高めることにつながる。さらに、個人個人の進歩の過程を大切にしてく評価と指導姿勢が、聴いたり表現したりすることが気持ちよくできる感情へもつながると考える。

(4) まとめ場

子どもが、めあてをもって表現を追求していくことに意欲を感じられるには、過去にめあてを達成しその結果、音楽的な喜びを感じとれた経験があり、今の学習で達成の喜びが味わえる期待感をもっていることが条件となる。そのためには、向上した瞬間をとらえて教師が賞賛し、向上したことを子どもに味わせる体験をさせることや、向上しようとして努力している姿をとらえて激励することなど、みんなで認め合い評価する場を設ける必要がある。したがって、一時間内であっても、単元のまとめ場であっても発表の場を設け、教師と子ども、また子ども同士が、感じたこと、思ったことなど心の触れ合う場をつくりたい。お互い認め合わせながら、良いところを学びとることが明日への新たな意欲と高まりにつながってくると考えるのである。

このような学習の場をポイントにしながらか音楽科授業の構想を次のように図にまとめてみた。



2. めあてを追求する音楽表現のプロセス

めあてに向って、学級(集団)の個々の児童が、相互のささえ合い、協力、評価(自己評価、相互評価、教師の評価)にかかわりながら、創意工夫や個性のある発想を表現活動に生かし、せまっていく活動。

追求の過程と関連づけて音楽表現のプロセスを描くと右の図のようになると考える。(井坂・木村・真田)